
すき

ホタル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すき

【Nコード】
N4310A

【作者名】
ホタル

【あらすじ】
好きになって、喜んで、悲しんで。高校生の恋愛の物語。

第一話：好きな人（前書き）

初めての連載、学園小説です。温かい目で見守ってください。

第一話：好きな人

好きです。好きです。好きです。

寝る前に呪文のように呟く日々が一ヶ月続いている。

恋をすると幸せな毎日が訪れると思っていたのに、いざそんな恋なんぞというものに転がりこんでみると、切なくて苦しくてやりきれなくて、恋の病という言葉だけがしつくりと納得がいった。

「それが恋つてもんでしょ」

この苦しみを、恋の一言で簡単に済ませてしまふ香織に少し腹がたった。

弁当を食べ終わった私は、一番後ろの席で、折りたたまれた携帯電話をくるくると回す。

そんなことをしながら鈴木真人のことを考えると。じわっと一瞬で幸せが広がって顔が緩んだ。

「マコトかあ、笑顔がかわいいんだよね」

私はだらしない笑顔のまま頷く。

「だいたい美由紀は欲がないんだ」

欲がないのではなく、それが上手く出せないだけです。心の中で呟いてみたけれど、口に出せないところがやっぱり私の欲が無いところなのかもしれない。

「まあ、それが美由紀のいいところでもあるけれど」

香織はそう言っちょつと笑顔を止めると、恋愛だけは自分勝手にやんなきゃだめだよ。という言葉に、私は大丈夫なことなど一つも無いのに、

「だいじょうぶ」

と言って笑うと。それならいいけれど、と言って香織も笑った。

香織には彼氏がいる。その彼氏は私にとって格好がいいとか、性格がいいとか、そういうことは無かったけれど、私も真人とそんな

関係になれたなら。何て考えると香織が羨ましかった。

「ああ、やっぱりだめ」

私はそう言つてうなだれる。ひんやりとした机の冷たさがおでこ
と腕に伝わり、私は一瞬驚いたけれど、そんな冷たい机さえ全て暖
めてしまうほど私の顔は火照っている事に気がついた。

「ちきしょう、好きだよ」

何でこんなことになってしまったのだろうか。真人の笑顔は確か
に好きだった。爽やかに笑う真人は誰からも好かれたけれど、素敵
な笑顔を見せる人なんてほかにもいる。けどそう、私は見てしま
ったのだ。

もしかしたらそれは見間違ひなのかもしれないけれど、彼の泣い
ている姿を。

いつも笑顔ばかり見せる真人の涙という、正確には泣いているで
あろう姿という裏技に私は、あれよ、という間に恋心は生まれその
心は加速度的に膨張した。宇宙は膨張していると言っけれど、そん
なことは私の恋心に比べればに小さな膨張のように思えるほどに。

真人に近づくほど駆け足で過ぎていく時間は、遠くなるほどに遅
く過ぎる。近づくと言つても同じ教室で、真人の後姿を眺めるだけ。
それでも学校の授業は早く過ぎる。私の席から見える真人の姿は私
だけのものだと、勝手なのだけれどそう思うと、幸せで、授業中の
睡眠は少なくなつて、黒板の文字を追う時間も同時に少なくなつた。
「ねえ、こくつちゃんよ」

冗談で言っていると思つた香織の顔は笑つていなかった。

「むりだよ」

ほとんど話したことすらないのに、ただ振られるだけに告白する
なんて耐えられない。

真人が笑っていると最近むかつく。

むかつく。

むかつく。

むかつく。

借りたかった新作のDVDがいつまで経っても借りられない苛立ちに似ているけれど、そんな

苛立ちだって今ほどではない。むかついて、苦しいのに真人を再び見ると一瞬でそれが幸せになる。そして家に帰るとまた苦しくなつて、なぜ人は人を好きになつてしまうのか。何て考えて答えがでないまま、また悶々と呼吸が乱れる。

告白することだって考えなかったわけじゃない。だけど、好きだつていう単純な言葉を言うだけなのに、そんなことを考えるだけでも私はその重さ押しつぶされそうになつてそれを誤魔化すために音楽を聴いて、涙を流すのだ。

学校の一日も、家での一日もなにが起ることもなく過ぎていく。雪のように降り積もるこの気持ちに、私はただただ呆然と立ち尽くす。

第一話：好きな人（後書き）

ペースはかなり遅いですがよろしく願いします。

第二話：ドリームキャッチャー

ねえ、苦しいよ。

苦しくて苦しくて、ただ好きだということがこんなにも苦しいなんて思わなかった。

こんな想いが幸せなの？

私は病気なのかもしれない。だって、こんなにも真人のこと好きになってしまったのだから。

「で、マコト君には告白したの」

バイトを終え、事務所でそう言う充先輩に私は首を横に振る。

「しちやえばいいのに」

簡単にそう言うって、会った初日にこのラッキーストライクは爆弾を落とした米兵が言った言葉から命名されたんだ。なんて嘘物語付きの煙草に火をつけた。

「してません」

私が言うつと、俺だったらオーケーしちやうのに。そう言うて灰皿に軽く煙草を小突かせると、灰が散った。

「誰にでもそう言うてますもんね」

私の言葉に充先輩は否定もせずただ笑った。先輩の余裕がむかっていた。

「先輩は彼女になんて言うて告白したのですか」

主導権を握ろうとした私の言葉に先輩は簡単に答える。

「馬鹿だな。好きだよって普通に告白したただだよ」

「馬鹿ですよ」

そう言うつと、先輩は可笑しそうに笑った。大学生になったら告白だって簡単に出来ちゃうのだろうか。私だって馬鹿だと思っただけで情けないほどに怖くて仕方ないんだ。だって好きなのだから。中学校の頃の告白がみんなに冷やかされたことが心に残っているのかも

知れないとも思ったけれども、きっと違う。そんなこと考える余裕が無いほどに好きになってしまっている私は何だか滑稽だと思った。そんなことを思いながら先輩を見ると、慌てた声でごめんなんて謝られた。

どうしたんですか？

そう言おうと思ったのに声が出なかった。そして一瞬にして頬を伝った感触で自分が泣いていることに気がついた。

「ごめん。つらいよね」

先輩の優しい言葉で余計泣けてきた。優しい言葉は爽やかに心のバルブを開けてしまうのだ。

「でもさ、やっぱり告白するしかないよ」

私は頷く。

「もしだめだったらさ、何でも好きなもん奢ってやるから」

「うん」

私は再び頷いた。

まるでただあやされている子供のようだったけれど、もうどうしようもなくなっていた。

私の心は一日一日削られて、芯だけ残された鉛筆のように脆くなっていたのだと気がつく。明日こそ告白しよう。そう思うと、あの時の真人の姿を思い浮かんだ。あの時の真人はきつと泣いていた。バイト先とは反対口の駅前ロータリーから少し離れた路地で見かけたのは、バイト帰りの寄り道だった。

一ヶ月ほど前、バイトを終えた私は一緒にあがったバイト仲間と出来たばかりのメロンパン屋に行く途中だった。遠くからギターを片づけている姿を見て、こんな所で路上ライブをやる物好きもいるんだと思いながら近づくと、それは真人だった。瞬間真人は涙をぬぐった。汗なのかと思ったけれど、その日は寒かったし、もう一度ぬぐったのはやっぱり涙だった。私は見てはいけない物を見てしまったような気がして、急いでメロンパン屋へと向かった。

どんな歌を歌っているのか。偶然見つけたときはすでに片付けて

いたので歌は聞いていなかったけれど、香織に聞いたらオリジナルを歌っていると言っていた。

「まこと、たまに路上ライブやっているみたいんです」

私が言くと、先輩が頷く。

「そうなんだ」

「もし、今日もそこで歌っていたら私、告白してみようと思います」先輩は煙草の火を消すと、そうか。と言ってにこり笑ってバックから小さな物体を私に向かって放り投げた。私は何とか手でキャッチすると先輩の顔を見た。

「これ、インディアンのお守りやるよ」

そう言われて、手の中のものを見ると小さなドリームキャッチャーだった。

「何これ、これ眠るときに枕の近くに下げるやつですね」

「そうみたいだけど、俺が告白するときそれを握り締めていたんだぜ」

そう。そう言ってドリームキャッチャーを握り締めると、勇気が湧いて来るようで、先輩の優しさが嬉しかった。

「じゃあ、お疲れ様です。ありがとうございました」

そう言って事務所を出ると

「がんばれよ」

先輩がそう言ってくれた。

第三話：告白

一瞬今日の占いが気になった。恋愛の運勢はどうだっただろうか。コンビニで確認しようと思ってやめた。

何だか告白をやめるための理由を探している気がしたから。

いるかどうかわからないその路地へ向かうはずの足は、時より方向を変えていた。事務所から歩いて十分で着くその路地に、二十分かかっても着かない。時間だけがいつの間にか過ぎていく。いたら告白。もし振られて私は正気でいられるのだろうか。暗くなった空の下、酔っ払い何人かで歌っている歌さえ耳に残らない。

私はドリームキャッチャーを握り締めて、路地へ近づく。近づくたびに意識が遠く白くなっていく。メインのロータリーから二回ほど曲がったその路地へは古着屋が最後の角となる。

一度立ち止まり息を呑む。いるだろうか。告白できるだろうか。吐きそうになりながら、古着屋のガラスを見ると、情けない自分の姿が淡く映っている。

勢いをつけて私は古着屋を曲がる。
いた。

うつかり落としそうになったドリームキャッチャーに力を入れる。

この前同様真人は片付けていた。

ドリームキャッチャーを握り締めた手からじんじんと痛みが滲んだ。

とくとくと体内を流れる血液は私の心を強く叩く。鉛のよう重くなった足を一步一步送り出す作業が何だか億劫に感じられる。近づくたび胸が痛くて苦しくなっていく。だけど、もう引き返すわけには行かない。

真人の前まで来ると私に気がついた。

「まいったな」

最初の一言に私は簡単に動揺した。

「うた、聞いててくれたのかな」

真人の言葉に私は首を横に振る。

「通りかかったただけか。結構遅い時間だけど」

「うん、バイトの帰りだね」

私は笑って見せたけれど、顔が固まっていた顔がきしきしと音をたてている気がした。真人と話したのは初めてではなかったけれど、久々に発した私の言葉は嘘であるところが何だか悲しい。

「家、どっち方面？」

真人はギターボックスを担いで聞いてきた。

「駅のほう。隣の駅だから」

私が答えると

「調度良かった。俺もそうなんだよ。一緒に帰ろうか」

真人の提案に私はこぼれそうになる笑顔を必死に堪える。

「いこうか」

真人はハンチングを被るとそう言って歩き出した。私も急いで横に並んで歩き出した。何だか彼氏と彼女のポジションと言う感じがして嬉しかった。

「ねえ、好きなアーティストとかっているの」

私が聞くと、当たり前前だろ。と言っていつもの笑顔を見せる。

「ブルーハーツが好き」

もつとマイナーな名前が出てくると思っていた私は少し拍子抜けした。

「ブルーハーツみたいになれたらいいなっと思うよ」

真人の横顔に私の恋心を再確認する。

「私も好きだよ。ブルーハーツ」

真人の前でいうすきという言葉を意識してしまっただけ少し顔が熱くなった。

食べ物では焼肉が好きだとか、テストがやばいとか、そんなどうでもいい話が私の耳を通して心の中でぽかぽかと幸せに育つ。好きなんだ。私は真人が好きなんだ。その言葉も、声も、思考も。まだ

まだ知らないことばかりなのに、きっと何が来ても私はやっぱり私はそんな真人が好きなんだと思う。

好きなんだと思うたび真人を見てはその笑顔に私も笑った。一駅なんて早すぎて電車に乗っていることすら忘れそうになった。もう少し、本当はもう少し二人で、本当の本当は終点まで行きたかったけれど、たった一駅で私たちは降りて、反対口に下りる真人と別れた。

「じゃ、明日」

真人は最後まで笑顔だったけれど、私は最後まで笑顔でいられたのか不安だった。

学校で会えることは嬉しいけれど、それまでの間を私は何だか一人取り残されている気がした。帰り道私はブルーハーツを借りた。布団に入ってドリームキャッチャーを掛けると私はイヤホンでブルーハーツを聞いた。ブルーハーツの熱い言葉を聴きながら、私は眠りに落ちた。

第四話：やさしさ

やかましい音で目が覚めると、それはブルーハーツだった。

この想いが青春と言うのか解らないけれど、これはこれで悪くない。今ならそう思えるほどに昨日の真人との会話は私の心を有頂天にさせた。腹立たしかった笑顔は自分に向けられた瞬間幸せになって、あの怒りは私以外の人へ向けた嫉妬心だったのだと気がつく。そして学校に行けば真人がいる。

何だかすべてに感謝したい気分だ。

いつもの学校の朝。教室でそういうと、アンタは何てめでたいんだ。なんて香織に言われた。

そんな言葉さえ、祝福の言葉に聞こえてにやにやしていると、香織も呆れて笑う。

「かおり、少しやせた？」

わずかに顔がシャープになった気がして聞いてみると、ダイエット中、とこたえた。香織は何でも辛抱強く集中力がある。だから、学校の成績も良いしお洒落や流行に対しても敏感で、カラオケでも多少の好みはあるにせよ大抵の新曲は歌えた。普段当たり前のように近くにいて気がつかなかったけれど、そう考えると香織は凄い女だと思った。

「べつにやせる必要なんてないのに」

そう言う

「ちょっとお腹がね」

「何ダイエットやってるの」

そう聞いた途端真人が教室に入ってきて私の意識がそちらに向かう。それを見た香織はすきなんだねえ。なんて語尾を延ばしたけれど、それは何だかからかわれている気がした。

真人は入ってくるなり身近な友達に挨拶をすると、たいした音も

立てずにこちらへと向かってきた。

「おはよう」

「おはよう」

「昨日は不味いところみられちゃったね」

「片付けだけだったけれど、それが不味いところならそういうことになるね」

私が言うのと真人はそうだったね。といって香織のほうへ向いた。

「香織が言ったわけじゃないよね、歌っていること」

「だったらあんたは歌を聴かれているよ」

「それもそうだ」

そう言って再び真人はこちらを向いた。

「歌っていること、出来るだけ秘密にしておいてほしいんだ」

そう言くと、じゃあ、と付け加えて自分の席へと向かった。そしてこの時頭をよぎった。香織は真人がオリジナルを歌っていることを何故知っていたのだろうか。私の視線に香織は気がつく。

「彼氏がね、仲良かったんだ。真人と」

「そうなんだ」

そう言いながらも香織への嫉妬は消せない。私の知らない真人を香織が知っていて、私は真人の何を知っているのだろう。そう考えると、ほとんど何も知らなくて昨日やっとともに話せただけで有頂天になっちゃっていた自分に気がつく。真人がブルーハーツを好きなことを知っていても、そんなの一日中聴いていても、真人のほんの一部に触れたのに過ぎないんだ。

「ごめんね」

香織は何も悪くないのに謝った。だけど、私はむくれていた。そんな自分があまりにも最低で涙が出そうになった。

「こんど、真人の歌ききたいな」

私がそう言くと、香織は立ち上がって真人のほうへと向かった。戻ってきた香織は

「来週の土曜日七時くらいだって」

と言った。

香織の優しさが嬉しくて、羨ましかった。

第五話：Saturday

私は翼がほしい

そら飛ぶ翼がほしい

けれど、翼があっても私はとべない

そら飛ぶ勇気がないから。

だから私はほしい

そら飛ぶ勇気が

あなたへ会った勇気が

あなたに触れる勇気が

ネットで見つけたこの詩が好きなんだって香織に言ったら、いい詩だねって言うてくれた。駅前のマックとスタバは込んでいた。だから私たちは少し離れた小さなドールでカフェオレをすすった。ガムシロップを入れすぎたカフェオレが甘ったるい。

あの日からの一日は長かった。胸に膨らむ希望という名の風船はどんどん膨らんで、期待で胸がいっぱいになるというのは、こういうことを言うんだと思った。

「雨が降ったらやらないよね」

私が外を見て言うのと、香織はうなずいた。

「まことのオリジナル曲、聴いたことあるの？」

私が聞くと、香織は一口カフェオレを口に入れた。

「あるよ。でも、一曲だけ。もう一曲あるらしいんだけど」

「へえ」

私はそう言うて再び外を見る。空はひどく濁っていた。そんな空を見ると、なんだか悲しくなってきた。

「今日、聴けるといいね。二つとも」

私がうなずくと、雨が降ってきた。小さな水滴がガラスに鋭くへばりついた。いくつか続くとその数はとたんに増えた。外を歩いて

いる人が傘を取り出す。一つ一つ花が咲くように開かれる傘がやっぱり私には悲しく映った。

そして、香織の携帯が鳴った。

「今日、だめだった」

やっぱり。自然と出た感想はやっぱりだった。私は真人の歌が聴けないんだ。

真人への想いは、あの日から教室で話す機会が増えて、切ない時間が幸せな時間になっちゃっていった。だけど、私はもうそれじゃ我慢できなくて、真人のオリジナル曲が聴きたかったし、真人ともっと話をしたかったし、真人に触れたかった。

「気持ちってさ、理性じゃどうしようもないよね」

私が黙っていると香織はそう言った。

「そうだね」

「ねえ、カラオケ行こうか」

私は声を張り上げて思いっきり歌った。告白もこのくらい思いっきりできたらしいのに。そう思いながら私は声をからした。

第六話：雨の日

土曜日に降った雨は月曜日になってもやまずに、私の気持ちを少しずつ鬱にさせた。

学校へ行くのがだるい。身体を動かすのもだるい。そんなことを考えていると真人への恋心も友達との人間関係も何だかだるい感じがしてきた。

行って友達の中に混ざればそんなだるさも飛ぶのに。

土曜日のカラオケで私は香織を通して真人とメールアドレスと番号を交換した。そのアドレスも番号もまだ私の携帯とは無関係のようになだ入っているだけだった。

「体調悪いんだったら学校休む？」

私の心と無関係に母親がドア越しに聞いてきた。

「いや、いくよ」

何だか今日休んだら明日も明後日も休んでしまふ気がしてそう応えた。

外に出ると冷たい空気がむき出しの顔を襲う。

六月の雨はあんなにうつとうしかったのに、十二月も近くなるとひどく冷たくなる。

そんなことを考えながら通り過ぎる周りの景色をぼんやりと眺めた。

特別目に留めることもなく流れる周りの景色が、何だか自分の高校生活を写しているようでぎょっとして立ち止まった。そのまま自分の行き場所を見失ってしまったような気がして、突然学校へ行きたくなくなった。

「まいっ たな」

そう呟いてみたけれど、誰が応えてくれるわけでもなく、言葉はただの言葉として私の耳にだけ届いて消える。真人にメールでも送ろうかと思って携帯を取り出したけれど、やっぱり何を送っていい

のか解らなくてポケットにしまった。

私はそのままコンビニへ行って雑誌を買った、近くのマックへ行った。

壮健美茶を持って禁煙席の二階へと足を運んだ。学校をサボると決めた途端足は軽くなり、雨の音さえ何だか心地よく聞こえてしまふのは何故だろうか。そして、上り終え、隅の席が空いているか確認した途端私は壮健美茶を落としそうになった。

真人がいた。

「おう」

私のことに気がついた真人は待ち合わせの人が来たかのように、いつもの笑顔で私に挨拶をした。

「なにやってんの」

自分の立場を忘れそう聞いてしまったけれど、何だか真人の笑顔に救われた気がして恥ずかしい。

「いや、今日雨だろ。だから行く気がなくて」

南の島の大王でもないのに真人は平然とそう言っただけ。

そう思いながらも

「そっちは」

と言われて真人と同じ答えを返してしまった。

「早く座りなよ」

同じテーブルに座るのは少し気が引けたけれど、断る理由も見つからず対面に座った。

真人はホットケーキをプラスチックのナイフとフォークを器用に使って、一片にしたホットケーキを流れるように口に入れた。ギターをやっている人が全員そうではないだろうけど食べる姿が早くて綺麗だった。

「美由紀ってさ」

「うん」

「部活入っていなかったよね」

「うん」

「なんで」

「なんで？」

真人の手の動きに見とれていた私は何も考えずに、返事をしていた。

「何で部活やらなかったの」

ふと私が真人の顔を見ると、思ったよりも顔が近くて驚いた。慌てて硬い背もたれに背中を押し付けると、壮健美茶を手にとってストローを啜えた。どんなに考えても興味も無くて大変そうだったから。と言う理由以外見つからない。

ストローをくるくる廻しながら言葉を探した。

でもやっぱり見つからなくて

「興味がなかったから」

と言った。

「そうか、そうだよな」

真人は何に納得したのか解らないけれど、一人でそう呟いた。

「真人も入っていないんでしょ」

真人こそ軽音部にでも入ればよかったのに。

「そんな時間無くてさ」

何に忙しいのか解らないけれど、真人はそう答えた。

「俺、これから行くところあるから」

「そう」

真人が立ち上がると、取り残された気がして孤独が込み上げてきた。

「じゃ、またな」

「うん」

私は一人壮健美茶を啜ってこれから何をしようか考えた。

第七話：香織

会いたい！ってメールで送ったら会えるのかな。

今何してる？ってメールで送ったらちゃんと返ってくるのだろうか。

そんなことを思いながら携帯の画面を眺めてる。会っているときはただ心臓が高鳴って幸せな気持ちなのに、あえない時間はただ苦しくてせつない。

「彼氏と別れそうなの」

香織からの電話に出ると、香織は開口一番そういった。私はどんな言葉をかければいいのか解らなくて、そうなんだ。だなんて他人事のようにつぶやいてしまった。

「なんでかなあ」

香織にわからないことが私にわかる筈もなく、私はただ恋愛って難しいね。だなんてありきたりの言葉を返した。

「あいつのこと、好きなんだ。好きなのに、あいつは俺とは合わないって、いったいどんな女になればあいつに合う女になれたのかな」
そう言って香織の嗚咽が聞こえた。香織が泣く声を聞いて私はただうろたえた。香織は私から見てもいい女だと思う。だから、香織が振ることはあっても振られるなんて考えもしていなかった。ただ、香織の彼氏が友達に茶化されているときに、付き合っていく自信がないとつぶやいたことを思い出す。

「私、頑張っているのに」

なんだか私も泣けてきた。熱い涙がこぼれる。頑張りすぎて、それが彼氏にとって重かったのかも知れないと思った。勉強だってダイエットだって頑張って成功してきた香織がその頑張りで恋愛が失敗するなんて、私には理不尽に思えて、たいして頑張っているわけでもなく真人のことを好きだとか言っている自分が情けなかった。

「香織はがんばってるよ」

そう言いながら、香織が痩せていっていたのを思い出す。それはダイエットではなくて、やつれていっていただけだったのだ。

「香織、最近うまくいっていなかったんだね」

「うん」

言ってくればよかったのに。そういいかけて止めた。

気がつかなかったのは私だったんだ。真人のことばかりで、香織の話をちゃんと聞くこともせず。香織は私に気を使って言わなかったのだと今になって気がつく。

私は香織に何をしてやれるだろうか。何もできずにただ私は一緒になって泣いた。

第八話：香織からのメール

わかれちゃった。

学校から家に着くと直ぐにきたメールは香織からで、二人で泣きあった電話の三日後だった。

真人のことでうきうきしていた自分、真人との些細なやりとりには嫉妬していた自分勝手さを思い出すと、自分自身に腹が立った。

電話でもしようと思ったけれど、何を話せばいいのか解らなくてベッドの上に横たわり携帯のディスプレイを眺めた。意味も無く電話帳を開いたり閉じたりしながら香織に掛ける言葉を探した。

私は香織にたくさん助けてもらっているのになぜ私は香織のために言葉さえ掛けることが出来ないのだろうか。

そう思いながら寝返りを打った瞬間携帯が鳴った。

真人からだった。

通話ボタンを押して私は息をゆっくり吸った。

「おう」

「おう」

真人の挨拶に私も答える。

「今電話大丈夫？」

「うん」

「香織、別れたんだろ」

「そうみたい」

真人と香織の彼氏が知り合いだったことを思い出す。

「そうか、それだけちょっと確認したかったんだ」

「ちょっと待って」

私は何も出来ないかもしれない。けれど、真人には歌がある。一

瞬そう思った。

「ねえ、歌ってあげてよ。香織、元気付くと思うんだ」

携帯越しの沈黙が重い。

「だめかな」

真人の部屋の音がするような気がした。実際にはただの沈黙なのに。

「俺のうた聴いたって元気になんないよ」

「そんなこと無いよ。私は聴いたことないけれど、香織は絶賛していたよ」

雨が降った土曜日のカラオケを思い出す。別れた彼氏との初めてのデート、最後に真人の路上ライブを聴いたのだと。そのときは気づかなかったけれど、悲しそうにそう言って笑っていた香織の姿が私の胸を刺す。

「わかった」

静かな返事が聞こえた。

「ありがとう」

私は少し興奮ぎみにお礼を言う。

「じゃあ、明日夜八時に仲良し広場に連れてきてよ」

「うん。わかった」

仲良し広場は学校から少しはなれた小さな公園だった。昔あったジャングルジムは壊され、背の低い滑り台とブランコが二つとベンチがいくつあつて、春には桜が咲くので、たまに花見の酔っ払いがジョギングをしている人のストレッチ場所以外めったに人は来ない。

「じゃあ、明日学校で」

「うん、じゃあね」

私は電話を切ると急いで香織に電話をした。

励ましの言葉も掛けずに

「明日、夜時間あるかな」

そう聞いていた。

「うん」

香織の声は思ったよりも元気で安心した。

「じゃあ、空けといてね」

「何かあるの？」

「それはお楽しみだよ。それより大丈夫なの？」

私の質問に少しだけ間をおく。

「うん。何となく解っていたし」

「そう。これからどうか行こうか。服とか買いに」

私の言葉に香織は、今日は少し一人で考えたい。と答えたから、香織がそう言うならそうするべきだと思って、明日もちゃんと学校に来てよ。と言って電話を切った。

電話を切って私は少し不安になった。本当に真人の歌を聴いて元気になるだろうか。

いや、きつとなる。私は自分の気持ちを盛り上げた。カラオケからの帰り道、私もすごい楽しみにしていたのに残念だな。と言った香織の言葉を思い出す。

第九話：冬の公園（前書き）

ここに出てくるオリジナル曲はいずれ発表しようと思います。因みにこの物語を作ろうと思ったキツカケです。

第九話：冬の公園

人はどうして人を傷つけるのだろうか。

幸せは傷と引き換えに手に入れるものなのだろうか。

冬に行く夜の公園はひどく寒い。

今日の学校での香織は終始明るく振舞っていたが、逆にそれが痛々しくて、つらくても泣くことが出来ない学校の教室は窮屈なものだと思った。一度家に帰り、公園近くのコンビ二で香織と合流すると公園に向かった。向かいながら私と香織の間に会話は無かった。約束の時間に少し早く来着いた園に人は誰もいなく、隅で猫だけがのっそり歩いていた。

「わたし、浮気されたんだ」

ベンチに座って私が真人に着いたことをメールで知らせると、香織はそう言った。私は香織のほうを向くと、香織は空の星を数えるように上を向いていた。その姿をみながら、私は無性に香織の元彼に対して腹が立った。

「そんな男は最低だ」

「ほんと最低だよな」

私の言葉に香織が応える。

「でも、そんなあいつが本当に好きだったんだ」

香織の言葉に私は、そう。と言って私も空を見た。小さく輝く星が時々空気にゆれ、刹那的に消えてはまた輝いた。

「おまたせ」

「ぜんぜん」

私がそう答えると、真人はブランコの仕切りの棒に座ってギターと取り出した。いつも笑顔の真人は真顔のまま、何も発せずおもむるにギターを鳴らし始めた。曲名も言わなかったからよく判らなかつたけれど、昔のコピー曲で二曲目はブルーハーツの『ラブレター』

だった。

三曲目を終えると。

「こっからはオリジナル曲」

そう言って、歌いだした。真人の歌声は特別声量があるとか、音域が広いとかは思わなかったけれど、歌に心がこもっていて、聴く人を優しく包んでくれているようだった。

オリジナルの一曲目の途中で、香織は泣き出したから、私も思わず泣き出した。

泣きながら、香織の横で不謹慎だと思いつつも、こんな歌を歌える真人がますます好きになった。

オリジナルの一曲目は幸せな優しい曲だった。

「俺はさ、基本的に本当に好きだったなら、いくらでもチャンスはあると思うんだ。これからの長い人生の中、学校生活の中でも、もう一度振り向かせることが出来るチャンスが」

真人はそれだけ言って二曲目を歌いだした。

二曲目は悲しい歌だった。子供の頃の恋心の歌。

そしてそれが真人のことだと思うと、泣けてきた。真人が路上で歌っている理由がわかって、同時に真人の恋心も解って告白する前に振られた気持ちだったけれど、それでも、それだからやっぱり私は真人のことが好きなんだと思った。

「実話なの？」

私の言葉に真人は、

「昔の話だけだね」

そう言って照れ笑いを見せたけれど、それがどうしても悲しそうだった。

「以上、真人でした」

真人がそう言っていると香織はありがとう。と礼を言った。

第十話：帰り路（前書き）

少しずつでも進めてなんとかこの小説は書き終えよう思いました。
いつか、書き終えたいです（汗）

第十話：帰り路

布団に入ると真人の歌が浮かんできた。

真人のギター姿とともに。

真人は未だにその人の事を想っているのだろうか。

肺に入ってくる冷たい空気が身体の火照りをどんなに下げようとしても冷やすことはなく、ただ頭がさえていく。ただ同じ事をぐるぐると考え、頭の横に転がる携帯も同じようにぐるぐる廻す。

真人は私たちを送ってくれたと言ったけれど、何となく真人と時間を共有するのが気まずくて、断った。それにそこまでしてもらったのも何だか悪い気もした。暫く話もせず香織と二人して星を見ながら歩いた。寒さは一段と増していたけれど、寒いほど星が綺麗に見えるのは何故だろうか。そして寒いほどアスファルトは温かみを持っているような気がするものも。

「まだ好きなのかな」

学校の近くを通り過ぎたところで突然口を開いたのは香織だった。

「どうだろう」

私はその言葉の解釈に少し戸惑った。私が？香織が？それとも真人が？

暫くアスファルトを二人の靴がたたくと再び香織は白い息を吐いた。

「中学生の頃の恋心なんて」

ふわっ、と浮かんたその白い息は一瞬で消え、なんだかそれが切ない。

小学生だろうと中学生だろうと、いまだに歌い続けているのだからやはりまだ好きなんだろう。小学生の頃の恋心なんて忘れてしま

つたし、中学生の恋心だつて私の場合、今となつてはただの思い出となつてしまつてゐるけれど、それはきっと私が歌い続けるだけの想いがなかつたからで、それはもしかしたら真人と出会つたからかもしれない。

「まだ好きなんじゃないかな」

私はそう言つてもう一度星をみた。

「そうなのかなあ」

そう言つて香織も星を見た。

「そうなんだよ」

「そうなのかあ」

そこまで話すと、香織と別れるところに辿り着いた。

「じゃ、今日はありがとう気をつけてね」

香織の言葉に、私も同じ挨拶を交わした。

まだ好きなのだろうか？

香織と別れて一つ一つ足を繰り出すたびに、その言葉が頭でちらちらと気になりだし膨らんでいった。途中猛スピードで走る自転車に轢かれそうになつて罵声を浴びせられた。ふと私は踵を返して公園へと向かつた。まだ真人はいるかもしれない。直接会つて聞いてみよう。

公園から出て二十分、いるはずもないのに、身体は勝手に動いていた。繰り出す足は徐々に速くなり、歩くペースから早歩きになり、上体を前に倒した。それでもなお加速は収まらず、私は走り出した。みるみる学校まで近づいたと思つたらすぐさま後方へと流れ、吐く息は大きく白くまんべんなく排出された。じわりと汗が滲み出し、頭の中はシンプルに真人の答えを求めた。

公園の入り口に仁王立ちし、中を見たがよく解らず、そのまま地面の感触を踏みしめるように中へ入つていった。歌を聴いたベンチまで辿り着いた。額から零れた汗が顎を伝つて地面に落ちる。

いない。

当然だ。

私は一人ブランコに乗りながら、呼吸の乱れが収まるのを待った。急激に身体は冷やされていくのがひどく心地いい。ブランコを少し漕ぐとベルトのきしむ音が聞こえた。私は何だかそれが嬉しくなってきた。一杯漕いだ。ぶんぶん揺れる身体が宙に浮いているようで一人はしゃいだ。

何だか恋心も悪くない気がした。

そして家に帰って風邪をひいた。

第十一話：翌日

ねえ、しっている？

わたしがあなたを好きな事。

ねえ、気がついて

わたしがあなたを好きな事。

けどやっぱり気がつかないで…

朝起きると、頭はストロブに当たりすぎたときのようにぼうつとした。

このまま学校を休もうかとも思ったが、やはり昨日の歌のことが気になって、放課後本人に訊くことにした。本当に訊けるのか甚だ疑問は残ったけど、今日訊かなければこの風邪が治らないような気がしたし、むしろこの風邪は真人が原因で引き起こされたと思うと今日訊かないわけには行かないのだ。

授業はいつも以上に退屈だった。授業だけでなく、休み時間の香織や他の友達と過ごす時間さえも億劫に感じるのはやはり自分は風邪を引いているせいなのだと思うと、悪いこと全てが風邪のせい出来る気がして、誰にもばれないように一人で笑ってしまった。

どうやって訊き出せば良いのだろうか。

「私が放課後うまくよんであげるよ」

私を悩ませる疑問に香織はいとも簡単にそう言って笑顔を作った。

「どうやって？」

うつ伏せてなかなか働かない頭を伸ばした腕に転がしながら香織のほうを見る。見ながらやっぱり香織はモテる顔をしているなあ、なんて考えてしまうのも、やっぱり風邪のせいなのだろう。

「まあ、まかしといてよ」

何だか楽しそうに言う香りにこのまま任せていいのか不安が残ったけれど、これ以上考えてもいい案の浮かばない私は観念したよう

に香織にまかせせることにした。

放課後になっても気だるい気分は抜けず、なんだか風邪が悪化したようだった。寒気が時折身体の芯から頭のとっぺんに突き抜けては小さく身震いをした。教室から見える校庭では、サッカー部が練習を始め、掛け声が聞こえる。香織は放課後教室でみんなが帰るまで待っているように言っただけのまま先に教室を出て行ってしまった。

教室から一人ひとり出て行くと、その度に挨拶をするのが面倒で寝たふりをした。

私はここで何をしているのだろうか。

ぼんやりしていると、そんな気持ちが浮かんた。

遠くから様々な部活動の音が聞こえると、少し取り残された気がするのに、そんな教室が好きなのだと確信した。その心地よい教室に包まれるように私はうつ伏せたまま目を瞑った。真人のことが少しずつ頭の中で小さくなり、とても穏やかな気持ちになった。

真人が誰のことが好きでもやっぱり私は真人が好きで、それに協力してくれる香織がいて、友達がいて、なんなことが何だか幸せで…

私は少しずつ暗闇に吸い込まれていくように眠りに落ちた。

第十二話：放課後

ねえ、あなたは

アナタハダレガスキデスカ？

広い砂漠の中で私は歩いている。

さっきまで出ていた太陽が隠れていくと暗闇が少しずつ熱を奪っていった。空気が凜いで、澄んでいく。けれど、暗闇は私からも体温を奪ってなんだか寒い。僅かな温もりを求めて足元に広がる砂にすがってみるのに、その砂さえ暗闇に飲み込まれていく。

私はどうして良いのか分からず寝転んだ。するとそこには小さな星々が私を包むように輝いていた。輝きは微かに温もりを発していて、ついに見つけた温もりには私は身をゆだねた。私はこの温もりを求めていたのだろうか。だったら私はずっとここにいたい。

そう思っていたのもつかの間、張り付くことない砂が私を飲み込んでいく。私は砂漠の中に飲まれるように沈んでいった。私は抵抗をしない。私の心はいつしか温もりを見つけただけで満足していたのだろうか。本当に欲しい温もりもきっと私はこのよう満足してしまうのだろうか。

けど、それで私は本当に幸せ？

目が覚めるとそこには真人がいた。

「だいじょうぶ？」

真人の言葉が心にしみた。私の心は夢の中の砂漠のようにぬくもりに乾いていたのかもしれない。私はもともと身体を起こすと大丈夫。と小さく答えた。答えながら私の肩にかかった学ランが星々の温もりだったことに気がつく。

「で、話って」

真人の言葉でふと現状を思い出す。

香織が約束通り呼んでくれたのだ。でもどうやって？

「ねえ」

飛び出した声はなんだか自分の物のようには思えなかった。

真人は目の前の机に座り、いすに足を乗せると次の言葉を待つように前かがみになった。

「昨日はありがと」

そういうと真人はさらりと笑って、たいしたことないよ。なんて返した。そんなことを言いたかったのではないのに。

「それだけ？」

真人がそう言ったので私は首を横に振った。真人の歌を思い出す。

「あのうた」

私の言葉はのろまな亀のように漏れる。

「まだ、まだその子のこのこと忘れてないの？」

私はおそろおそろ真人のほうを見る。

「うん」

真人はあっさり頷く。

「好きなの？その子のこと」

震えていたかな、私の声。訊かなかったほうが良かったかもしれない。でも、もう遅い。

「ずっと、一緒だったんだ」

真人は両手を机に乗せ、少し後ろにのけぞると話し出した。

「小学校入った時からずっと一緒だったんだ。五年間。一緒に登校して、一緒に帰って、一緒に寄り道して、一緒に遊んで、恋愛感情とか好きとか、具体的な感情は解らないけれど、一緒にいて楽しくてそれが普通だったんだ」

そこまで言うのと、ふと真人は外を見た。外はすでに暗く、星が輝きだしていた。けどその輝きからは温もりは感じない。

「そいつは、茜は六年生になる前に引っ越した。引っ越して暫くすると茜から手紙が来たんだ。だから俺も手紙を返して、それから暫く手紙のやりとりをするようになっていった。最初は毎日のように

していた手紙のやり取りも、暫くすると月に一回くらいになって。だけど、毎月毎月、それは続いたんだ。二年生になって突然手紙が返って来なくなるまで。俺は返事が来なくなっても、三ヶ月間今まで通り送って行った。その三ヶ月目の手紙で久し振りに返事が来て、でも」

真人の言葉が一瞬とまった。

「でも？」

私が促す。小さな沈黙が教室の底へと広がっていく。水槽に落とした墨滴のようで、溜まっていく空気が重く感じた。

「でも、」

真人が肺に空気を入れる音が聞こえる。その空気もどこか黒い気がした。

真人の肩が小さく刻み、そして真人は振り返った。

「でも、しんじやってたんだ。最後の手紙は茜の母親からだった。茜の病気で引越しをしたこと。途中から茜の母親が代筆していたこと。返事を返せなくなって二週間後に死んでしまったこと。馬鹿みたいだろ？死んだ相手に手紙を送っていたんだぜ、もう届かないのに」

そう言いながら真人は笑う。

泣きながら。

あの時と、初めて路上の片づけをしている時に流した涙と同じ涙を流して。

けど、だから真人は歌を歌っているのだと解った。空に歌うように上を向いて。

「そうなんだ」

私の力ない言葉がふわふわと浮かんで消えた。煙草の煙みたいに。こんな時、何て答えるべきなのだろうか。真人の気持ちに空気を伝えて私の胸を揺さぶった。悲しい気持ちはこうやって伝染するのだと、この時初めて実感した。でも、私は泣かない。泣いてたまるか。

「そうなんだ」

今度は力強く声を出した。

これは私の決意表明。想い出への挑戦状なんだ。

私は立ち上がった。経った瞬間ふらつきそうになって熱があったことを思い出したけど、負けるわけにはいかない。

「かえろうか」

私が言うのと真人が頷いた。

今度はいつもの笑顔で。真人に残った涙の後を見ないようにして私は勢いよくバックを手にした。

黒い空気を教室に残すように私はずんずんと歩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310a/>

すき

2010年10月8日14時36分発行